



津山市立河辺小学校の非認知能力を育成する取組を取材しました。

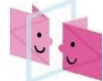
【キーワード】

- ①自分らしさ（らしさん） ②自分ならできる（できるん） ③仲間と取り組む（なかまん） ④フィードバック ⑤一人一人の居場所づくり（つながり、自信）

岡山大学中山芳一准教授による夢育を通して育てたい非認知能力を表すアイコン（ロゴマーク）



自分を高めめる力



自分と向き合う力



他者とつながる力

【取組のポイント】

1 【目標とする児童の姿の明確化】

- 子ども達の自己表現力を高めたい、人間関係を豊かにしたい、コミュニケーション力を高めたい、自己肯定感をさらに高めたいといった課題に対して、対話を取り入れて、どの子どもにも**一人一人の居場所**をつくることとした。
- 目標とする児童の姿を、ルーブリックの観点で踏まえて明確にした。



2 【非認知能力育成の視点】

- 見えにくい力を言語化することとし、学校の取組のキーワードを「自信のある河辺っ子」とした。自信がある姿を「自分らしさ（らしさん）」「自分ならできる（できるん）」「仲間と取り組む（なかまん）」とし、教師・児童で共有した。
- 子ども達の活動の**プロセスを見取る**ことを意識し（レンズを持ってフィードバック）見えにくい非認知能力の価値を意識づけるようにした。
- 伸ばしたい非認知能力を活動の中に**意図的に仕込む**ようにした。
- 行動を振り返らせ、**フィードバック**することを繰り返した。



3 【事例】

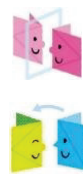
（授業で伸ばす）

- 話し合いの際に、3つの視点の一つを盛り込み、焦点を当てるようにし、非認知能力についての意識付けと見取りを行った。3年生の体育では、「なかまん」の視点を意識し、対話をさせ、「みんなからアドバイスをもらったから技ができた。」「次回はポーズをしたい。」と活動後の振り返りで自己有能感（自信）を感じられる記述が見られた。
- グループでの話し合いの際に「わからないときは、わかっているところまで伝えよう」「自分の考えとちがう人の意見のいいところを見つけよう」を平素の授業の中で意識した。



（学校行事で伸ばす、6年生で伸ばす）

- 行事ごとにめあての設定をし、自分の変化の気づきも意識できるよう、事前・中間・事後にアンケートを行った。
- 運動会では、チーム別の発表時間をきちんととり、6年生の活躍の場を設定した。高学年の頑張りが下級生に伝わるようにしたり、**仲間と取り組む**意識を高めたりするようにした。このことは「あんな6年生になりたい」という手本となり、子どもたちの意識をよい方向に導いている。
- 学習発表会に向けての中間のアンケートで「仲間と取り組むことがあまりできていないと思っているので、みんなと一緒にもっと協力して頑張りたい。」と自分と向き合った児童は、事後アンケートで「仲間と取り組むことをしたら、もっとうまくいくようになった。できると思うことを心がけたら、緊張をあまりしなくなった。」という変容が見られた。



取材を終えて

河辺小学校では、これまでの課題を見つめ、どの子どもたちにとっても居場所のある環境を学校全体でつくられています。また、3観点15項目を意識して行うことで、適切なタイミングで子どもたちに見取りを返していくことができ、次へつながる自信にもなっていました。目に見える形で見取りを返すことで、子ども同士が、子どもと先生とがつながることにより、一人一人に寄り添った取組にもなっていました。そして、共有や交流することで自分や他者を知り、認め合うことで、居心地のいい居場所になっていくのだと感じました。